

石黒広昭 編著
 幼児教育 知の探求 6
 『保育心理学の基底』

萌文書林 2008年 A5判 285頁 ¥2500(税抜)

大網麻奈美

「保育」と聞くと、一般的に、学校に通うようになる前の子どもが、大人によって守られ、自由に遊んでいるというような様子が思い浮かぶだろう。もちろん、そういった側面があることは間違いない。しかし保育の現場というのは、子どもの生活の場であると同時に保育者の生活の場でもある。また自由に遊ばせるといっても、そこには「こんなふうには育ってほしい」というような子どもに対する教育的な期待も含まれているはずだ。保育とは、一体何が行われている場なのだろうか。その問いに、保育者と子どもの関係のあり方をじっくりと議論することで答えてくれるのが本書である。

「保育心理学」とは聞きなれない領域であるが、著者も言及しているように、それは決して心理学を保育実践に応用する、といったものではない。動機も関心も保育実践に根ざしている。問題が起こっているのも現場であり、問題の解決を必要としているのもまた現場だからである。読者はリアリティを感じながら本書を読み進めることができるだろう。

本書は大きく2部に分かれている。第1部では、どのようなものが保育心理学の射程に入るのかが述べられる。後半に「メタアクト」と称して二つの事例があげられているが、それは第1部での主張にリアリティをもたらしけると同時に、事例の例示が、理論の下ではその事例を超えて一般性をもった学ぶ機会となることを示してくれる。

第2部では5名の研究者がそれぞれの研究テーマについて語っている。

【第1章 人間関係の礎を築く保育：乳児期の保育課題】では、乳児期の保育についての議論が、従来アタッチメント（愛着）に偏ってきたことを

指摘した上で、保育者と子どもの関係の形成において重要となる新たな着目点を提起する。

【第2章 遊びの心理学：幼児期の保育課題】では「文化的共同遊び」の研究事例が紹介され、遊びの実践の中で保育者と子どもがどのように関わっているのかが丁寧に描かれる。遊びは子どもが自由に想像を膨らませているものと思われがちだが、実際はそんなに単純なものではないことがわかる。

【第3章 幼児期の子どもの育ちの支援者になる：保育者の育ちと課題】は、保育者側の成長に焦点を当て、その過程を丁寧に記述している。保育の場においては、子どもだけでなく保育者も周りの人に支えられて成長する。しかし、保育者の抱える問題は個人の力量の問題として片付けられてしまうことが少なくない。本章を通して、保育者集団の構造を整えることの意義を教えられる。

【第4章 学童保育における協同性の発展と指導員の力量形成：学童保育指導員の育ちと課題】は、学童保育実践の質的な発展と指導員の力量形成の関連を読み解いていく。学童保育は運営の主体や利用施設も多種多様であり、一般的な議論をすることが困難である。その中で本章が、その実践の本質を仮説的に整理し論じていることは非常に有意義である。

【補章 遊びと学習、就学前保育におけるその新しい関係——スウェーデンの幼児教育の新しい潮流】ではスウェーデンの新しい幼児教育カリキュラムの捉え方が紹介される。スウェーデンでは1996年に保育が教育システムに統合され、2年後にナショナルカリキュラムが導入された。それに伴う保育現場の変化が描かれる。日本においても「就学前は遊ぶべきで、学童期には学習すべき」といった考え方が一般的であるが、実際には遊びにも学習の次元があり、その逆もまた然りである。就学前の学びについて考えることで、生涯に通じる新たな学習観が立ち現れることを実感できる。

現在、育児休暇の不備や保育所の不足など、日本の保育環境が乏しいことは明らかである。本書がよい資源となり、保育の危機を打破するための議論が活発になされることを期待する。